

こぶしがより

ガッとするよ

Vol. 364

2014・6・8発行

野菜の作業が始まって早1年。
色々な野菜を袋詰めしました。入れにくい
物もありますが、仲間同士声をかけあって
毎日頑張ってます(´0´)



【400字で語る福祉⑩】

「利用者の今」は経験、
縁、環境…でできているんだなあ、と。



◎布野恵子さん(こぶし作業所支援員)

福祉という仕事について数年経ち、改めてじっくり
と考え直すと、福祉という仕事の中でたくさんの出会い
がありました。私であった人々の中には、とても
素敵な家族に囲まれながら生活している人、複雑な家
庭事情を抱えている人、金銭的に恵まれない生活をして
いる人など、様々な人々があります。その人それぞれの
生活観や環境、価値観がある中で、全く同じケース
は一つもなくそれぞれの生き方があるのだなと実感さ
せられます。出会いの中で利用者の取り巻く環境から
家族の大切さやまた、難しさを感じました。

利用者の今は、それまでの経験や関わってきた人、
環境の影響の上に成り立っており、そういったことから
人は作られているのだなあとと思うと、とても興味深
いです。また個人を大切にしていく上でもそういった
思いを忘れないようにしたいです。どんな人にもかけ
がえのない存在がいることを教えてくれ
たのが福祉なのかもしれません。



●特集：こぶしの会の幹部研 第2回(福田雅章さんインタビュー)…2-5

●400字で語る福祉 ⑩布野恵子(こぶし作業所支援員)⑨阿部さおり(第2けやき作業所支援員)…1,8

●新連載 食道さんぽ【こぶし・にこにこ弁当】…6-7

●報告「精鋭3人」…8

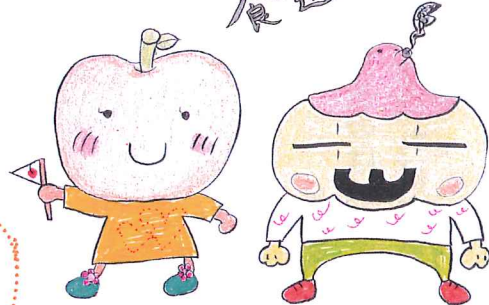
●一般就労者の現在 ●ギャラリーこぶし…9

●こぶしづかん…10

●連載【社会モデルを地域文化に●】…11

●事業所一覧 ●ちえぶくろう…12

食道さんぽ



私たちのやってきた「トビ」が 制度をつくるんです。

こぶしの会の幹部研修（報告②）

研修の講師に再インタビュー

福田雅章さん

●児童養護施設 養徳園・園長

●認定NPO法人青少年の自立を支える会・事務局長

前号では、昨年度実施した幹部職員研修について、高橋常務理事に取材しました。今回は、講師として講演いただいた社会福祉法人養徳園の園長福田雅章さんに、こぶしの会を担う「幹部職員のあるべき姿」や「福祉のこれから」について、高橋常務のインタビュー形式でお話いただきました。（取材・高橋温美&菊池・星宮||編集部）



「福祉」は自分たちでつくるもの

そもそも「福祉」というのは、制度が先にあって福祉の仕事を行っているわけではありません。また、制度があるから「やる」とか「やらない」とかでもありません。放っておくわけにはいかないし、いつになっても福祉は満たされるものでもなく、終わりがありません。常に隙間があるのです。その隙間を大きくしない取り組みが必要であって、福祉をつくってきた先人たちはみんなやってきたことなのだと思います。しかし、現代では、大学や専門学校があり、制度の名

の下で福祉の仕事に就く職員が増えています。そのため、制度に守られている職員が増えており、それでは仕事をしてもあきちゃうのではないかと感じています。先程も話したように、実践が先にあつて制度ができていくものであり、我々が制度をつくっていく必要があると思うのです。

「おかしい」を、どうにかしたくて 福祉に携わる

大学は行政の制度等をわかりやすく伝えてくれるだけ。より良くしていくためには、現場にいる我々が動くしかないと思うのです。福祉をつくってきた先人たちは、

福祉を作るのは「長」の役割。 「お金がなければお金を作れ」

みんなやってきたことであり、仕事を生業として選択してきたのです。実際の支援の現場では、業務の標準化や共通言語は必要であると思いますが、壁にぶち当たらないと課題は見えてきません。「おかしい」と感じるものがなければ、何も変わることはないのです。しかし、何かに「おかしい」と疑問を抱くことは大切なことであり、その「おかしい」をどうにかしたくて福祉に携わっていくものだと感じています。

その福祉をつくっていくのは「長」の役割であり、そのため「お金がない」のであれば、どう工夫すればよいか等を考えなければなりません。そこで、幹部職員は

その工夫を行い、様々な人や機関とかけあい、お金を生み出していくのです。

具体的には、自立援助ホーム「星の家」（宇都宮市）がそうです。その当時、このような施設は都市圏にしかありませんでした。1997年に「星の家」が全国で12番目に開始し、いまでは全国で自立援助ホームは72か所まで増えています。

実践を積み重ねていくとそこにお金がつくようになり、お金がつくようになると参入してるところが増えるんですね。

しかし、新規参入が増えてくると変なところも増えてきたり、採算に合わずにやめるところも出ています。

私たちの主張は現状の否定や批判から。 当然、軋轢が生まれる。

同じように、日光市のNPO法人だいじょうぶ（平成17年4月設立）は、旧今市市の役所の職員の方が尽力してつくり、認められてお金がつくようになった。しかし、行政側は保守的であり、新しいことを認めさせるのは大変で、私たちの主張は現状の否定や批判から入るため、行政は嫌がるものなのです。それによって、行政との軋轢が生まれることもあります。融和を考えていると進んでいかなくなってしまいます。それでも認めてもらわなければなりません。認めてもらうためには、時間をかけて実践を積んでいくしかないのです。

寄付集めもする。 採算優先で運営が硬直化している。

2000年の社会福祉基礎構造改革により、高齢者ビジネスなど、福祉に企業的発想が入ってきましたが、社会福祉法人も規模が大きくなればなるほど大変で、採算

ベースで動くようになってしまいます。支援費制度以降、経営者は電卓をはじく時間が増えていったのであるうし、新規参入事業者も採算ベースで考えるため、ビジネスライクな話になり、施設運営も硬直化していると思います。私たちとしては、子どもの発達の分野が得意だから強化していきますが、これしか自信をもってやれないというのもあり、自信がないから他のことには手を出さないということでもある。これまで「老人ホームはどうだい？」と言われたことはありますが、断りました。確かに、経営的な視点で言えば財政面では安定するかもしれませんが、いままでのことが壊れてしまうという懸念があるし、事業規模が大きくなれば関わる職員も増えてくる。そうした人々を束ねていくというのでも大変です。

措置制度では、費用負担は行政が丸抱えで子どもの生活に困らないお金はついてきました。しかし、子どもの成長のため、ああしてあげたいこうしてあげたいと思えば、その他にも寄付を集めたりすることも必要で、そういう活動は我々も行っています。多くの事業や事業所を抱える法人では、金持ちの道楽でやる人もいるのかもしれないですが、素人ができるものではないし、そう単純なものではありません。

本来帰るべき地域にはグループホーム がなく、帰れない現状はおかしい

地域に根ざし、地域に認めてもらい、その人の住んでいた地域に帰りたいと考えていますが、私たちのような施設のある周辺にはグループホームが増えてきていますが、本来帰るべき地域にはグループホーム等がなく帰ることができない現状はおかしいと思うんですね。本来グループホームとういうのはそういうものでは



ないと思うのですが、このあたりにはいっぱいグループホームができていて、違和感を覚えています。本来の地域で生活できない人が、他地域のグループホームで生活するのは変だとは思いませんか。

私たちが地域の中で「身内」の役割を担う。「包括」する仕組みづくり。

いかに地域の子どもにとって利益になる施設をつくれるかと福祉を考えた時に、養徳園、氏家養護園では、保護者が病氣・出産・看護・仕事などの急な事情で子どもの面倒を見られないときに、子どもをショートステイで預かる取り組みを行っており、さくら市、宇都宮市、矢板市と委託契約を結んでいます。

私たちが地域の中で「身内」の役割を担っていく。昔は、親戚や隣近所の人が預かってくれたことがあったように、家族の近くの親戚のような存在にいかにしてなれるか。身内が困ったときに、予約なしで子どもを預かれるとか、本来はそういったものが求められているのだけれども、そういった本当のニーズに対応しきれないのが実情です。

いま福祉事業はどんどん細分化しており、縦割りになっていく分やりにくさも出てきています。とりあえず手を貸していく。何でもやる。そうすると、新たなニーズが見つかり、包括する仕組みをつくっていく必要性も出てくるし、見えてくる。

最近では、ベビーシッターに預けたら死んでしまったとか、悲しい事件が起きていますが、なぜ福祉に頼れなかったのかと考えると、福祉が身近なものではなかったからなのかもしれないですね。現代の人にとっては、インターネットの方がより身近だったのかもしれないですね。決して様々な制度ができて使いやすくなったわけでは

臨時職員に合わせた仕事になると質が下がる。だから臨時職員を正規職員にしていこうとしています。

施設依拠より地域福祉が本当の社会ではないでしょうか

子どもたちを地域の学校に通わせていると、保護者との交流があるし、友達も普通に施設に来るようになりま。地域の子どもが施設に来ることは大切で、施設がやれることはやっていきたい。子どもたちが何か問題を起こせば、すぐ施設のことを言われるけれども、それは当然のことだと思えます。それでも、施設の外に子どもを出していき、外に出て地域の人に見てもらおうようにしています。よくいろいろな施設では、施設の敷地内でお祭り等を行って人を呼んでいるが、私たちはアリの的に人を呼ぶことはしません。お祭りを開催するときは地域にある施設を利用して行っています。

親が知的障害だと養護施設入所が長引く。

児童養護施設では、知的障がい者の親で子どもを育てられなくて施設に来る子どもは多いです。また、障がいを抱えている女性が男性の食いにされてしまうケースもあり、望まない妊娠、出産をさせられてしまっています。知的障がい者であっても、子どもを産み育てられる環境をつくっていくことが大切であって、これができるれば、施設にやってくる子どもはだいぶ減るでしょう。また、親の育児能力がなく、ネグレクトから施設入所に至る子どもも多くいます。これを食い止められたら、施設を利用する子どもも減り、障がい者の施設も児童養護施設も減るのではないのでしょうか。いまとなつては、知的障がい者も特別支援学校の高等部に行くのが当たり前

もなく、効率化を考えた時にいつでも職員が待機していたらコストがかかってしまい、いつでもどこでも預けられるわけではないのが実情です。私たちはその瞬間に携わっているのですから。

「生きるために働く」という発想に「なり」にくい現代社会

地域の中で、私たちがやろうとしていることを理解してくれる人を増やしていかなければなりません。子どもたちも自立しなくてはいけないし、そのためにはお金をもらえるようにならないと生活ができません。施設を利用せざるを得ない状況下にあるのは、なにも障がい者だけではなく、それに施設から出した後の支援が大変で、一定の教育、職業教育が必要だと感じています。しっかりとその後の自立につなげないと、何を施設でやってきたのかと問われてしまうからです。

フリーターやハローワークを訪れている人が多くいるとは思いますが、仕事を選ばなければ、いくらでも仕事はあるのだと思います。いまは「生きていくために働かねば」という発想になりにくくなっており、仕事を選び好んだり、すぐに仕事を辞めてしまう人も多いのではないのでしょうか。また、「コミュニケーション能力がない」と仕事にありつけない傾向があり、企業も役に立たないと判断すれば首を切るしかない。それは、これまでと比べて企業にも役に立たない人の面倒を見る余裕がなくなってきたということなのでしょう。その一方で、施設出身の方がよっぽどしつかりしているし、しつかり働いていると私は感じています。

臨時より正職員。厳しいのは重々承知の「入づくり」。

親が知的障がい者だと入所が長引く傾向があつて、入所期間中ずっと親子分離が続いてしまいます。「子どもたちがここ（養徳園）でずっと育つていいの？」と疑問にも思うし、子どもに力がないのならなおさら、その子のいた地域で育てたほうがいいと思うのです。施設はサポートすることはできるが、帰ってくる場所ではありません。地域生活への移行を、地域でなんとかしてほしいと思っています。その子の生まれ育ったところがその子の本当の地域ですよ。

また、入所者の3、4割は、施設から社会に出ていきますが、大半は家庭に戻っていきません。入所者の中でも、特別支援学校に通学している子どももいますが、卒業後に家庭復帰できずにグループホームに入居し、作業所に通所するようになります。なぜか、卒園してもこの養徳

これまで職員募集できた人を面接するときに「この人をほかで雇うところはあるのかな」と思う人もいます。履歴書を見ても仕事を転々としているし、社会には二トはたくさんいるが、労働力は足りていません。働く喜びや何かの役に立つというのを、どう支援するかが課題なのだと思います。国は外国人を医療や福祉の現場に入れようとしています。いまある人材を活用することを先に考えてはどうかと思うんですよ。

組織の人材づくりを考えていく中においても、中途採用者も多くいます。主婦が関心を持って面接に来ることもあります。しかし、働きたいけれどもそこまで大変な仕事はしたくないと考えている人もいて、働くスタイルというのは人によって異なるんですよ。私はその子のその先の人生に関わることを常に考えていますが、そこまでしたくないと思っている職員もいるのでしょうか。やりたい人、そこまでやりたくない人、その人その人の力を活かしながらも分けざるを得ないのが現実です。やりたくない人は思いが強いですが、若い人はまだまだ未熟です。温度差の違いがあるとやりにくいもの、その違いを分かっていることは大切なことだと思えます。一方が同じ温度を他方に求めるとついてこれない人が出てきてしまします。その中でも、若い人たちの間で温度が違うのはとても困るんです。いま40人くらいの職員がいますが、みんな全然ちがいますよ。

40代で中途採用した職員がいる。志があるから頑張ってもらっているし、パートの人でも「私をパート扱いしないでください」とやる気のある人もいます。養徳園では臨時職員の構成率は少なく、正規職員が大多数です。外部の研修も積極的に受けさせています。通常業務に加えて外部研修と、かなり無理をさせているのはわかっています。きつくするとともにたたくて辞める。でも、子どもに関わるのはそういうことなのだと思うのです。

園のある地域で生活していて、その子の本当の地域に帰ることができないのです。

「障害者福祉のアイデンティティ」って何でしょう

福祉の分野の中でも障がい者福祉を志す人が少ないのは、職業選択の際に、そもそも「障がい者福祉」という分野があることを知らないからなのでしょう。つまり、義務教育の段階で、児童養護や高齢者福祉が私たちの身近なものではないため、福祉業界の中でも障がい者福祉の分野では特に入ってくる人も少ないのでしょう。また、福祉に入職してきた人たちも、まずは入職してきた際に抱いていた幻想を壊すことからはじまり、悩み苦しみを繰り返す。

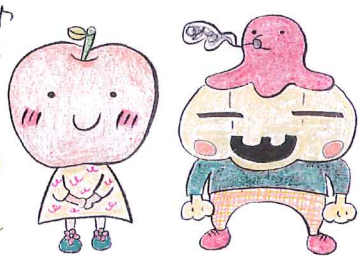
障がい者の暮らしの世界は、子どもの時から区別されて過ぎていきます。障がいのある子とそうでない子がお互いを理解し合う機会がありません。「障がい者福祉のアイデンティティ」って何なのでしょう」と私は思うのです。

【取材を終えて】くらしの場を必要としている人はたくさんいますし、グループホームがたくさんあれば良いとごく普通に考えていました。取材を終えて考え直されました。故郷を離れグループホームに入るといことは、家族や友人と離れ誰も知らない土地で一から生活を組み立てなければならないという事実が隠されていたのですから。

また、自立するために「労働」は必要であり、そのためにも「地域」に雇用を創出することは重要で、それこそが地域福祉なのだと再認識することができました。周囲の人が、何らかの障がいや病気を抱えている方の働きたい気持ちとその姿勢を受容することができれば、十分に働くことができるのです。「福祉の対象」を生み出さないように青年期までの発達段階を送るための支援をすることが、私たち支援者ひとりひとりにできるひとつの福祉なのかもしれません。(菊地)



◎長らく連載を続けてきました「たまみシュラン」に代わり、「食道さんぽ」が新しく始まります。みなさんよろしくお願ひします。今回は新編集委員の渡辺達也が取材してまいりました。



●さて、リニューアル第1回を飾るのはこぶし作業所の「にこにこ弁当」。お弁当づくりを通してみんなで成長している事業所です。辛いこともあるけど教えてくれる職員や仲間がいるから、お弁当づくりの楽しさややりがいがあるから続けられるそんなお弁当づくりを取材しました。お弁当づくりの現場からの発信です。

【こぶし作業所の歴史、にこにこ弁当の誕生】



昭和55年にスタートしたこぶし作業所の作業は、平成22年の茂原への新築移転までの長きにわたり無認可時代からの下請作業（ペアリングの組立）が中心でした。移転に伴い、仲間たちの工賃の向上を目指すべく下請けからの脱却を図りたいと新しい作業種目の検討を重ねました。こぶしの会では、けやき作業所のパン、セルフ・みらい、第2けやき作業所の仕出し弁当が先輩作業としてすでに組み込まれていました。議論の中では、“多くの仲間がかかわれるもの” “広く地域と関わりながら取り組めるもの” “高工賃につながるもの” を大切にしました。せんべい、豆腐、米粉パンなどの案も出され、研修に出かけ、試作品なども作りましたが、落ち着いたのは「こぶしの会が培ってきたノウハウを生かした事業」として、パンと仕出し弁当となりました。



食道さんぽ

こぶし作業所 「にこにこ弁当」



ハンバーグ弁当（チーズ） 価格500円。人気弁当の一つ。ハンバーグを含め、具材はすべて手作りのお弁当です。



こぶし作業所「にこにこ弁当」
 ●電話 028-653-1020 ●FAX 028-688-1121
 ●宇都宮市茂原 837-1

★ご対応頂いた堀内さんと荒木さん、弁当班メンバーのみなさんありがとうございました。特に、荒木さんのサバサバ・ドッシ



りした対応はまさに肝っ玉母さんといった印象を受けました。麦茶とポテトサラダごちそう様でした。荒木さんの人柄に押され迷わずお弁当を購入しましたが、美味しかったですよ。元気なメンバーが作るお弁当のおかげで元気を頂いちゃいました。（渡辺）

衛生維持と配達！
責任もって請け負います。疲れるけどやりがいがあります。



【お弁当作りで心掛けていること・楽しかったこと】

おふくろの味と手作りを大事にしています。その日のお弁当のおかずはその日の内に作ります。仕込みが難しいおかずは特に気を使いますし、メニュー作りも難しいですが、お弁当が美味しくできた時のうれしさやお客様の笑顔が目浮かぶと楽しくなります。材料は、地産地消を心掛けています。なるべく国産・栃木県産、直売所で購入するようにしています。難しいことやつらい時もありますが、やさしく教えてくれるのでがんばれます。



明るい！げんき！楽しい！



【聞いてみました】



—何人で働いているの？—

◆総勢18人でお弁当を作っています。朝7時30分から10時までが製造タイムです。それぞれが手際よく段取りをすることが重要

です。お弁当づくりの各作業を分担していますが、一人ひとりの作業が重要ですね。一日何個のお弁当を作っているの？—

◆1日70食から100食を調理しています。製造から配達まで一貫して行っています。—お弁当づくりで大変だったことは？—

◆おかずの仕込みやメニュー作りが大変です。日替わりにしてお客さまに満足して頂けるよう気を配っています。メニュー作りはお弁当作りの醍醐味ですが、その分気が抜けません。



生きるということを力強く表現したこの詩を作ってくれたのは、県東真岡の谷田部勝さんです。高校時代に作詩を始め、過去には下野新聞に作品が掲載されたこともあるほどの実力者で、作詩のサークルである「真岡雲の会」にて月1回の活動に参加されているそうです。ご紹介したのは一番新しい「希望」という作品。あえて私からはコメントしません。みなさんどう感じましたか？

公募しているところにどんどん応募したいと語ってくれた谷田部さんの作品、他にもご紹介したいものがありますのでご希望の方はぜひ編集部まで！(松本)

生きること 希望
 諦めたら終わりなんだ
 諦めたら……
 希望
 生きること
 生きなきゃいけないんだ

誰かが与えてくれるものではなく
 自分で掴み取るものだと
 難しいねと
 答えが返って来た
 そう難しい
 だけと
 諦めたら終わりなんだ
 諦めたら……



下野新聞にも掲載
実力者の詩

4月のある晴れた土曜日、のんびり
 まったりと作業にいそしんでいた県東
 真岡にひとりの来訪者が……。彼の名は
 日下田憲彦。

「トイレや階段、廊下の掃除をやっ
 ます。はき掃除、テーブルを拭いたり
 外の掃除もやったりしています」
 「働きはじめてから2週間くらいです
 けど、大変ではないですか」
 「職場でなかなかしゃべれないので、
 もっといろんなことを話せるようにな
 りたいです。いきなりは難しくても、
 少しずつ距離を縮めていきたいです」
 「前向きですね。仕事面ではどうで
 しょう」

「今は覚えることが多くて大変ですけ
 ど、慣れれば苦しくなくなると思いま
 す。今まで自分のやっ
 ていた掃除のやり方
 の悪いところを指摘
 してもらって、普段の
 生活にも生かされています」



特別編：就労者がやって来た！ 一般就労者の現在

……ここまで熱いメッセージをくれた
 方、初めてです。
 「読んでいる人に何か言いたいこと、
 ありますか」
 「5年間、途中で投げ出さず、諦めず、
 不可能と思ってもトライして少しずつ
 でも可能にしてきて、就職できたと思
 います」

長かった就職活動が実を結び、晴れ
 てフレッシュャーとなった日下田さん、
 まだまだたくさんの可能性を秘めてい
 るような気がします。(松本)

日々慌ただしく仕事をしている、
相談支援事業
そんな私たちの助っ人。精鋭3人追加！

こぶしの会には相談支援事業所が3か所あります。主に宇都宮市を対象のエリアとする「障がい者生活支援センターこぶし(こぶし作業所内)」、上三川町をエリアとする「上三川障がい児・者生活相談支援センター(上三川ふれあいの家ひまわり内)」、主に真岡市や芳賀地区を対象エリアとした「相談支援センターのどか・真岡センター」です。「のどか」は職員の公募によって決まった名称で、今年度からリニューアルしました。

3か所とも行政からの委託の相談支援事業と「サービス等利用計画」作成を中心に支援を行ういわゆる「計画相談支援事業」の大きく分けて2つの事業を行っていますので、職員体制もそれにあわせて2人体制となりました。周知のとおり、国からの方針で今年度中に障害福祉サービスを利用している人全員に「サービス等利用計画」を作成していくことになっています。また、上三川と芳賀地区のセンターでは、委託相談、計画相談のほかに病院や施設での生活から地域での生活に移行する人を支援する「地域移行・定着(一般相談支援)」の指定も受けています。

形だけの「サービス等利用計画」にならないよう、相談支援の命ともいえる「アセスメント」とそれに基づく「プランニング」を必死で行いながらも、計画の期日に追われることで日々の相談支援を十分に展開できないことに苛立ちを感じながら、日々慌ただしく仕事をしています。そんな私たち(こぶしの会の相談支援事業)を助けるべく配置されたのが、今年度から新たに相談支援に取り組む3人の職員です。今までそれぞれの現場でしっかりと経験を積んだ精鋭ということで、一致団結してこぶしの会の相談支援事業の充実のために力を尽くして行きたいと考えています。(相談支援センター 山崎)



新入職員の意気込みと抱負

中見政男
 (相談支援センターのどか・真岡センター 相談支援専門員)

4月から相談支援専門員として、県東地区を担当することになった中見政男です。私は相談業務の際いつも心にとどめておくことが2つあります。1つ目は、「障害」とは何を指すのか？ 環境の不備や無理解が、その人らしく生きるための「障害」となっている場合があるということです。2つ目は、ご利用者様が何を伝えたいのか、言葉・行動などを通して受け取るという視点です。何を言ったか、ではなく何を言いたいか、を感じ取る姿勢を大切にしています。

そして、弱者を生み出さない成熟した社会へと向かうことを願いつつ業務に当たりたいと思います。よろしくをお願いします。

富山宏美
 (上三川障がい児・者生活相談支援センター 相談員)

利用者の方の何気ない会話の中に隠れている真実にも気付くことができるような相談員になりたいと思います。

400字で語る福祉⑬

※職員が400字で思っている「福祉」を語ります。

◎阿部さおりさん
 (第2けやき作業所支援員)



道具となること

いつも自分のことで精一杯な私が、なぜ人の人生を左右させてしまうような職業に就こうと思ったのか、未だに

不思議である。そんな私が、福祉について説明できる自信もない。ただ、支援者観として、曖昧ながらもずっと心に残っている言葉がある。福祉職とは、支援者自分自身が「道具」となり、自分に備わっている知識や技術・思考を駆使して、その人の人生がより良いものになるように関わっていく仕事、ということである。美容師さんがハサミを使うように、板前さんが

包丁を使うように、私たちは自らを「道具」として使い、仕事をしていくのである。いくら「道具」とはいえ、人間である自分自身をコントロールしながら、他者の人生に関わっていくことは難しく、エネルギーを使うものである。そんな仕事道具を、支援を必要としている相手のために使いこなせるようになったら、福祉について語るができるかもしれない……と思う。

【こぶしづかん=辛夷図鑑】こぶしの会に生息するけいけいな職員のおすすめの本を毎回ご紹介。



仕事の癒しは、「どうぶつの森」と買い物

飛川麻依 (とびかわ・まい) さん
第2けやき作業所 就労支援員



昨年末に結婚された飛川(旧姓 青木)さん。4月から“第2けやき作業所”と“おらがそば茶屋”を行き来することになり忙しい毎日を送っていらっしゃいます。

忙しい日々の癒しは旦那様とお出かけや買い物だそうです。時には東京まで車で出かけることも。服や雑貨を見るのが好きだそうです。特にリラックマはお気に入りのキャラクターとの事。

そんな飛川さんのお勧めの本は「ロスジェネの逆襲」。昨年ヒットしたドラマ「半沢直樹」の原作小説、第三作目になる、この本。ドラマから興味を持って手に取られてそうです。ロスジェネ世代の部下との考え方の違いなどに共感したそうで、銀行小説としても大変面白いと仰っていました。

いつも真面目に仕事に取り組む飛川さんですが、ゲームもするそうで、「どうぶつの森」にはまっているという意外な一面も…。忙しい中にも癒しを忘れない飛川さんでした。(北川)

※ロスジェネとは、バブル崩壊後の1994年から2004年にわたる空前の就職氷河期に世に出た若者たちのこと。ロスジェネ世代

どんなことでも、結果までのプロセスを大切に。

「リンゴの木は、リンゴの木だけで生きているわけではない。周りの自然の中で、生かされている生き物なわけだ。人間もそうなんだよ。人間はそのことを忘れてしまって、自分だけで生きていると思っている」

昨年40本のリンゴの苗木を購入した桜井さん。その苗木売場でたまたま見かけて目についたのがこの本。NHKの番組で取り上げられた木村さんの、長く壮絶な無農薬への挑戦の日々が記録されている本だそうです。

「リンゴの大量生産よりも品質を求め、当たり前のことを当たり前に行っていく。この人の生き様(人生)に共感した。リンゴでなくても良いんだよ。物事、結果までのプロセスを大切にしたい。物を作るときには基本を大切に自然の力を頼りに。人生もそうなんだよ。ぜひ読んでみてほしい」と。取材の後に本をお借りしました。

趣味については、ご自身でも遊びの幅が広いんだと話してくださいました。果物栽培、音楽、家庭菜園、日曜大工、車、食い道楽など。

本なんて読まないし話すことなんか無いよ。となかなか取材にこぎつけずに不安もありましたが、始めてみると趣味の話や仕事の話など、あっという間に時間が過ぎてしまいました。(長谷川)

桜井英司 (さくらい・えいじ) さん
けやき作業所 運転手



ロスジェネの逆襲
●池井戸潤 / 著
●ダイヤモンド社 / 1500円+税
主人公の半沢直樹は、部下の森山雅弘とともに、周囲をアツといわせる秘策に出た…胸のすくエンタテインメント小説!



奇跡のリンゴ
「絶対不可能」を覆した農家 木村秋則の記録
●石川拓治 / 著・NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」制作班 / 監修
●幻冬舎 / 1300円+税

臨時職員・パートでやりくりする福祉現場は「福祉が必要な職員で支えられている」と言えるかも。こんな過酷な職場環境の中で、たった5年で管理責任をまかされる中間的管理職員の苦悩……。低賃金の理由は「福祉=家事ハラスメント」だ。

社会モデルを地域文化に (連載第●回)
高橋温美 (こぶしの会常務理事)



職員はサービス管理責任者だけであり、その資格要件と研修制度が規定されている。そのほかの職員は、「常勤換算」という労働者をぶつ切りにしたような考えであるが、一人一人の勤務時間を合計したものが、職員配置基準に達していればよいのである。報酬単価(公的資金の支給基準)の低さや利益を産出す要請とあいまって、臨時職員の構成率が一気に高まった原因である。なお、現在の制度の前には保障されていた管理者、事務員、調理員等の配置義務はなくなってしまった。兼務や外部委託等やりくりが福祉の現場で蔓延していくことになる。

家事・養育機能の社会的分業が福祉制度が成立する根拠

現代の資本主義は、労働や生活の大部分が社会的な分業としておこなわれる社会である。ここに障がい者問題を含んだ社会福祉サービスの成立する根拠がある。地域共同体が機能していた時代には、介護や労働を含む生活支援は家族や地域共同体の中で支えられ、それが家事や養育の中身であった。家族や地域共同体は高度経済成長の中で解体し、介護や支援が社会的な制度として労働の対象となってきたという経過をまず認識しなくてはならない。だからこそ、保育、高齢者、障がい者や失業・疾病による生活問題は国民のニーズにまで高まっているのだし、その認識の深さや拡がり福祉制度の成立には必要不可欠である。

障がい者問題を社会的に解決する(組織的・集团的)力量がますます低下

さらに言う、障がい者問題等の解決は、始めに述べた問題発生経過からも理解できるように、社会的なシステムが必要で、社会福祉法人こぶしの会とそこで働く職員が存在理由がここにある。社会モデルとしての障がいの考え方が大切であるというこの根拠である。

しかし、冒頭にふれた現実の福祉現場では障がい者問題を社会的に解決していくと言(組織的・集团的)力量がますます低下しているように思われる。リアルにこの点に触れると、複雑で深刻な生活問題を抱える支援の内容も、臨時職員・パートでやりくりすると言(職員)の賃金・労働条件も困難な福祉現場には、福祉の支援も必要だと思われ職員により支えられていると言(管理)ではない。こうした過酷な職場環境の中で、法律では、たった5年で支援の管理責任をまかされる中間的管理職員の苦悩がある。

国民的差別の感じ「家事ハラスメント」を引きずる福祉労働

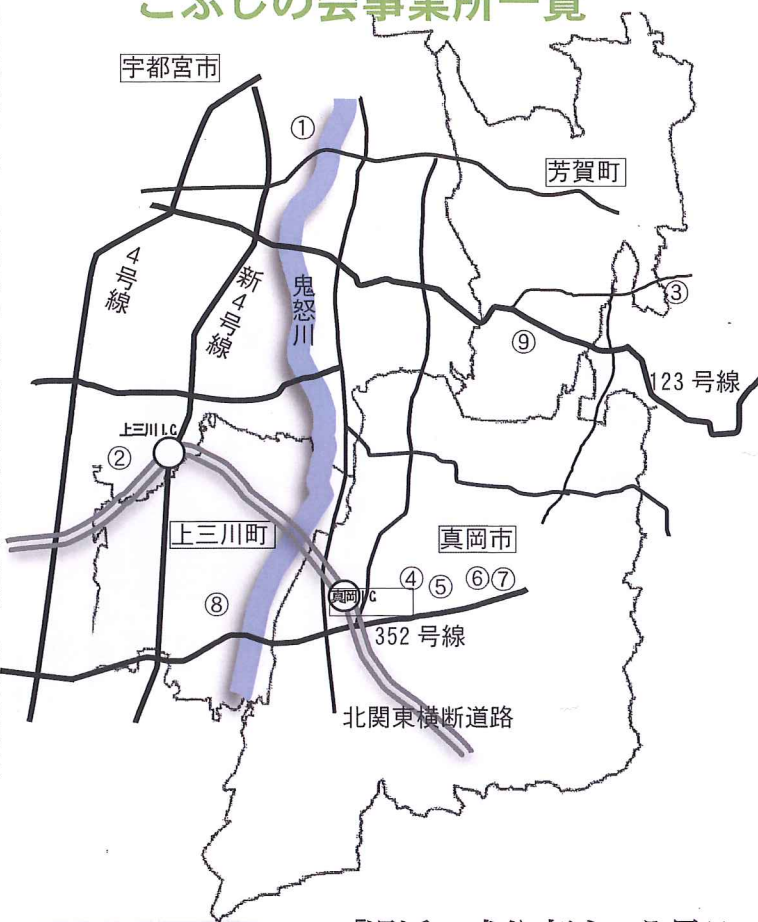
福祉とは、もともと家事労働であったし、ことを社会的なシステムとして公的な労働に転化したものであると捉えられるとすると、家事労働とは労働としての位置付けもされていないし、ことであり、ほとんどが女性に押し付けられてきた仕事である。最

近「家事ハラスメント」と言う言葉があらわれているが、男女共同参画の時代にあってもなお、家事は女性差別の現場であると言(管理)でも過言でない。この国民的差別の感覚が障がい者問題や福祉施策の内容を決定付けていると言(管理)ではないか。

家事労働の重要さを伝える格闘 議論・工夫・成果と課題をレポートしよう

さすがに、この家事労働の重要さを地域に知らしむべく、私たちの実践が要求されているのだし、その成果と問題を具体的に積み、事実として地域に伝えていくことが必須である。それは、実践と言(管理)を越えて格闘に近いものになるかもしれない。しかし、それを通じてしか福祉従事者としての自身の価値を見出すことは困難であると思う。制度を支えている人々の主体形成がされていない制度は不毛である。福祉の現場は、もう政策批判やスローガンだけでは解決できないところまでできているとおもうのだが、だからこそ、私たちが利用者(社会的弱者)の人間の成長の事実を作り出し、それに支えられて働きたく(健康者?)意欲をとりもどすことが重要だと思ふ。そのための真摯な議論や、具体的なこと、工夫、成果や課題を記録にし、多くの人に伝えていくことこそ現状打開のポイントだと思ふ。

こぶしの会事業所一覧



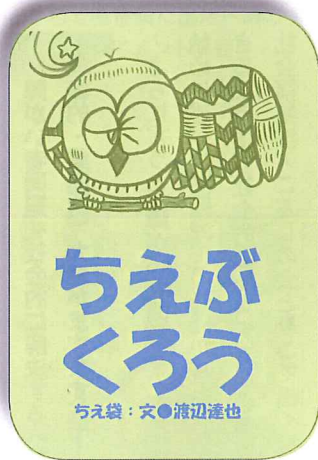
- ① 宇都宮市柳田町 1401
 こぶしの会法人本部
 028-613-3707 (F) 028-666-6128
 028-666-0418 (居住生活支援事業部)
 第2 けやき作業所
 028-680-5937 (F) 028-680-5938
- ② 宇都宮市茂原町 837-1
 こぶし作業所
 028-653-1020 (F) 028-688-1121
 障がい者生活支援センターこぶし
 028-613-5703
- ③ 芳賀郡芳賀町祖母井 2244
 けやき作業所
 028-687-1040 (F) 028-677-5789
 地域活動支援センター「ほっと CHA」
 090-7820-9165
- ④ 真岡市亀山 1043-23
 セルブ・みらい
 0285-81-1155 (F) 0285-81-1177
- ⑤ 真岡市荒町 3-9-5
 県東ライフサポートセンター真岡
 0285-83-2567 (F) 0285-85-8055
 お菓子工房 ピケ
 0285-81-7091 (F) 0285-81-7092
- ⑥ 真岡市荒町 111-1
 県東圏域障害者就業・生活支援センター
 「チャレンジセンター」
 0285-85-8451 (F) 0285-85-8452
- ⑦ 真岡市荒町 110-1 市総合福祉保健センター内
 芳賀地区障害児者相談支援センター
 0285-80-7765 (F) 0285-80-7765
- ⑧ 河内郡上三川町大字上三川 5082-15
 上三川ふれあいの家ひまわり
 0285-38-6821 (F) 0285-38-6841
 上三川町障がい児・者生活相談支援センター
 0285-38-6854
 アトリエ・ド・パン シュシュ
 0285-56-7731 (F) 0285-56-7732
- ⑨ 芳賀郡芳賀町西水沼 438-2
 おらがそば茶屋
 028-680-5091 (F) 028-680-5092

「湯活」成分表はこう見る！

日本人の温泉好きは古代まで遡り、古事記や万葉集にも温泉の効能が記されています。特に日本3古湯＝有馬(兵庫)、白浜(和歌山)、道後(愛媛)は有名です。古代からの温泉、一度は行ってみたいですね。

さて、温泉はその有効成分の種類と量によりいくつかに分けられています。そんな訳で栃木県の子な温泉の泉質についてメモしました。温泉散策の参考に。

- ①陰イオンの主成分がClイオンのものは塩化物泉。皮膚に塩分が付着して発汗を抑えるので保温効果があります。塩原温泉・喜連川温泉・新那須温泉など。
- ②陰イオンの主成分がSOイオンのものは硫酸塩泉。切り傷・火傷に効果あり、板室温泉・大網温泉などです。
- ③硫黄泉とは温泉水 1kg に総硫黄を 2mg 上含む温泉です。硫黄が遊離硫化水素の型で含まれるものは硫化水素泉と呼ばれます。日光湯元温泉・奥鬼怒温泉・新湯温泉・那須温泉郷の一部。火山活動が活発な地域に多くみられる温泉です。



【編集後記】

◆先日、平日の休みを利用してそば粉のガレットを作りました。久しぶりに楽しく料理ができ充実の時間を過ごしました。最近、好きな料理から離れていたことを実感し、今年度は、仕事も私生活も充実させようと改めて思いました。(長谷川)

◆こぶしだより編初めてのこぶしだより編集でしたが、周りの皆さんに助けられて無事取材することが出来ました。これからもご迷惑をかけると思いますが、良い記事が書けるように努力していきます。(北川)

★編集委員の一員として1年がんばります。読んでためになる記事・面白く読める記事づくりに努力します。これから、魚釣りに忙しい時期になりますが取材活動にも妥協しませんよ！(渡辺)

◆確かに資格は一つのステータス。それは認める。でも、中には自分の仕事も全うできないくせに持たざる者を見下した態度を取る、人間的に問題のある「頭でっかち名ばかり福祉士」がいらっしやるのも悲しい現実。何とか今年国家試験をクリアできたが、自分はそんなサイテー職員にはならぬ

よう、改めて気を引き締めた次第。(松本)

●魚と肉のどっちが好きかと問われれば、私は魚。できればお刺身がいいけど・・・いろんな食べ方で楽しみたい・お酒のお供にはおさかなですよえ。(菊地)

■連休も終わってしまい5月病絶賛発動中！予定していた4月からのウォーキングだって気候のせいにして全く動いていませんorz 5月中には始めようっ(´o`) (森島)